



## 生命をいとおしむ

吳市から北へ、東広島市へ通じる道路のそばに「畜魂碑」と書いた大きな石碑が立っています。いつごろ誰が建てたのか。それはたぶん、鶏か牛かブタか、そういう家畜の命を弔うために、それを飼育していた人によって建立されたものでしょう。私は時折その道を通りますが、その石碑を見るたびに、それを立てた人々の心の深さを思うことです。

また広島市の平和公園の片ほとりに「馬碑」と彫り込んだ石塔が立っています。聞くところによると、あの原爆投下の日、その近くに、陸軍兵舎の馬小屋があつて、被爆した多くの馬たちが、まことに悲惨な死に方をしたといいます。そこでそのことを憐れんで、関係者が供養の思いをもつてこの碑を建てられたということです。まことに心やさしい物語であります。いずれも生きものの命の尊さを思い、その命をいとおしむものの行為です。このような心は、これからも後世に向かつて、ずっと大切に引き継ぎ、育てていきたいものであります。

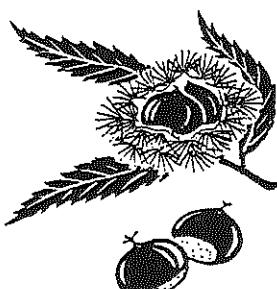
また東北の山形県あたりには、日本でも有名な材木が産出されるところですが、「これらには、所々に「草木塔」と刻まれた石碑が立っているときいたことがあります。木や草の生命に感謝し、それを供養するためのものです。ここにもまたこの地方の人々の、心の優しさがうかがわれてくることがあります。そしてまた長崎の名物に「カステラ」があります。今から四百年昔に伝えられた、スペイン

風のパンですが、今では日本の菓子になっています。

その長崎のカステラで、ことに有名なのが、福砂屋の製品で、それはとても美味しいものです。それについて、先日こんなことを聞きました。その福砂屋では、毎年のように鷄卵供養の法要が営まれ、私の知人がその法要の導師を勤めているのです。私はその話を聞いて、福砂屋の主人の心の深さについて、大きな感動をおぼえたことです。カステラをつくるには、ずいぶん多くの鷄の卵が使用されるわけですが、その一つ一つの卵にやどる命の大切さを思い、またその命をうばう自分の行為を思つて、懺悔と感謝の法要をされるとはなんと尊いことでしょう。

私は、この福砂屋のカステラが、ことに美味しい理由が、よくわかった思いがしたことです。

(信楽峻齋遺稿法語集より引用)



## ご案内

### 報恩講を勧めます

朝晩の冷え込みが身にしみる頃となりました。今年も報恩講の季節がめぐってきました。毎年、変わらず「続くこと」のありがたさをしみじみ感じます。勝林寺の報恩講のスタートは、本堂からです。どうぞ、みなさん誘い合つてお参りください。

## 十一月二十一日（月）

午後五時三十よりお斎始まり

午後六時三十より御伝鈔始まり

午後七時三十より法要始まり

午後八時一十分より法話始まり

午後九時よりお斎始まり

午前一〇時より法要始まり

午前一〇時五〇分より法話始まり

午後〇時よりお斎始まり

午後一時より送りバススタート

講師 当山住職 西池匡紹師

## 十一月二十二日（火）

午前九時より迎えバススタート

午前一〇時より法要始まり

午前一〇時五〇分より法話始まり

午後〇時よりお斎始まり

午後一時より送りバススタート

講師 当山住職 西池匡紹師

二二日（月） 横山一夫宅 七回忌  
一四日（月） 湯口裕宅 五〇回忌  
一二日（土） 横山伸三宅 三回忌  
九日（水） おみがき 清掃奉仕  
教区会議員研修（奉告法要）

本覚寺 報恩講

一〇日（木） 澤田貞彦宅 一二三回忌  
一四日（月） 西方寺 報恩講

一五日（火） 福成寺 報恩講

一六日（水） ダーナ職員全体会

二二日（月） 勝林寺 報恩講

二三日（火） 勝林寺 報恩講

二五日（金） 正法寺 報恩講

二六日（土） 佐田・奥栗尾・口栗尾報恩講

二七日（日） 出石組連研（光顕寺）

二八日（月） 田中嘉信宅 一三回忌

二九日（火） 日殿・保谷 報恩講

## 十一月 勝林寺 予定

三日（木） 光顕寺 報恩講  
四日（金） 正福寺 報恩講  
五日（土） 初田一三宅 忌明法要  
六日（日） 高福寺 大遠忌法要  
八日（火） 教区会議員研修（奉告法要）



## 中道

魚のいない砂漠に住む人たちは「おれたちは、一度もした」とは、あんな殺生をするやつは鬼だ」といつて、海の人たちを非難しました。ラクダのいない海に住む人たちはまた、「おれたちは、ラクダの乳を横取りしたりなんて、卑しいことはただの一度もしたことがない。あんなことをする奴はこじきだ」と砂漠の人たちを軽蔑しました。互いに言い合つた末、とうとう戦争になつてしまつたという話があります。人は、自分の立場にだけ立つてものを判断しがちです。砂漠の人は、砂漠の人の立場に立つてほかの国の人生き方を笑いました。海の国の人も自分の立場から砂漠の人の暮らしを軽蔑しました。「自分が偏った立場にとらわれるではない」お釈迦様の「中道」というみおしえはそのことをいましめてくださるのです。

年寄りの立場があります。若い人の立場があります。互いにその立場に固執して、意固地になります。互いにその立場に固執して、意固地になつたら戦争が起きてしまいます。かといって、年寄りの意見と若い者の意見とを、五分五分ごちやまぜにして、あれこれとりまぜてみても、それでおさまるものでありますまい。

ほんとうの「中道」というのは、年寄りは「年寄りの立場」にこだわっている自分を悲しく思ひ、若い人は「若者の立場」に執着する自分を鋭く顧みて、互いに「申し訳ないわたし」と詫びあう中でうまれる思いやりではないかと思うのです。如来さまのお光は、たがいにその立場にしか生きられないおたがいが、しかし互いに詫びあえる人間関係をつくつてください、そんなお光でもあるのです。

有難う

「助けていただきて有難う」「親切にしていただき

いて有難う」「教えていただきて有難う」「いんなにいいものをいただいて有難う」「有難う」感謝することばとして私たちは日常この「有難う」ということばを使っています。粗雑でとげしいことばの多い私たちの日常に、ひとつ玉のような輝きのある美しいことばであると思います。「有難う」とは「有ること難し」、めつたに、ちょっとやそつとで有るはずのない不思議なことといふ意味であります。飢餓が続いている社会に生きていた人々は、おそらく、ひと椀のごはんにも小さな人の親切にも、心から「有ること難し」、不思議なほどもつたない

ことと、喜んだことでしょう。

今はものの豊かな時代です。あるのが当たり前で、なかつたらきつちり要求して、要求して得られなかつたら腹を立ててもよい時代です。ですから「有難う」ということばも、実じつですから「有難う」ということばも、実じつのない単なる形式的な社交辞令になつてしまつてゐることは悲しいことです。この人生、人と生まれてきたことほど、有るはずもないほど不可思議な有り難いことなのではありますまい。そしてそのうえに、この人の世には、仏法さまがあつてくださいます。如来さまのお呼び声が聞こえていてくださいます。人と生まれさせてくれさせていただきます。如来さまの声が、いだいて、如来さまの広いお誓いの中に生き、生き変わらせていただくことがなかつたら、この自らの崩壊の音とともに学ぶ音が、淨土真宗の信心といわれるものです。

そして、蓮如上人は繰り返し「うお諭しです。四五人の衆寄合ひ談合せよ。かならず五人は五人ながら意巧にきくものなるあひだ、よくよく談合すべき」「一句一言を聴聞するとも、ただ得手に法を聞くなり」間違えてはいけないよ、ではなく、間違うものだから話し合おう、とおつしやつています。

（前住職 テレホン法話第一集より）

法語カレンダー十一月H.P.より抜粋

## にだ 信心にあらわするは

さとりの國にあらわするは



とすん

今日は、寺にまつわる豆知識を紹介いたします。まず、寺で暮らす私たち家族の総称は「寺族（じぞく）」といいます。住職のことは、浄土真宗では「院家（いんげ）」と言います。

寺族（じぞく）といいます。住職のことは、浄土真宗では「院家（いんげ）」と言います。とげしいことばの多い私たちの日常に、ひとつ玉のような輝きのある美しいことばであると思います。「有難う」とは「有ること難し」、めつたに、ちょっとやそつとで有るはずのない不思議なことといふ意味であります。飢餓が続いている社会に生きていた人々は、おそらく、ひと椀のごはんにも小さな人の親切にも、心から「有ること難し」、不思議なほどもつたないことと、喜んだことでしょう。

今はものの豊かな時代です。あるのが当たり前で、なかつたらきつちり要求して、要求して得られなかつたら腹を立ててもよい時代です。ですから「有難う」ということばも、実じつですから「有難う」ということばも、実じつのない単なる形式的な社交辞令になつてしまつてゐることは悲しいことです。この人生、人と生まれてきたことほど、有るはずもないほど不可思議な有り難いことなのではありますまい。そしてそのうえに、この人の世には、仏法さまがあつてくださいます。如来さまのお呼び声が聞こえていてくださいます。人と生まれさせてくれさせていただきます。如来さまの声が、いだいて、如来さまの広いお誓いの中に生き、生き変わらせていただくことがなかつたら、この自らの崩壊の音とともに学ぶ音が、淨土真宗の信心といわれるものです。

そして、蓮如上人は繰り返し「うお諭しです。四五人の衆寄合ひ談合せよ。かならず五人は五人ながら意巧にきくものなるあひだ、よくよく談合すべき」「一句一言を聴聞するとも、ただ得手に法を聞くなり」間違えてはいけないよ、ではなく、間違うものだから話し合おう、とおつしやつています。

（前住職 テレホン法話第一集より）

（文責 坊守）